2022年12月25日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

イエスの声が聞こえるか

［ルカによる福音書2章8～20節］

その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」 天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。聞いた者は皆、羊飼いたちの話を不思議に思った。しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

[１] あなたがたへの「しるし」

クリスマスおめでとうございます。今年は、年の最後の日曜日が「クリスマス礼拝」の主日になっていて、来週の日曜日はと言えば、もう新年・元日になってしまうのですね。でも一年の最後の礼拝がクリスマスであるというのも、新しくイエス様を心の中に頂いて、待ったなしで新年を迎えるということになり、それもなかなか良いな、と思わされます。何か勢いがあると言いますか。

今日の聖書箇所で登場する「羊飼いたち」、この人々も「勢い」があることを感じます。「証し人」「証人」という言葉がありますが、降誕の主イエス様と出会って、証しをする人になる、その一番最初の者が、この名前も記されていない羊飼いたちなのだ、と言えると思います。

今日の聖書箇所ですが、とても美しい降誕の「場面」です。ここには天使が現れ、さらに天の軍勢がそれに加わり、「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」との賛美の歌声が響いています。それを耳にしているのは、夜通し野宿しながら羊の群れを守っていた羊飼いたち。天使を目の当たりにし驚く羊飼いたち…。クリスマス・ページェントなどでは必ず表現される重要なシーンと言えます。それはそれでいいのですが、忘れてはいけないことがあると思います。それは、新共同訳聖書の小見出しもそうなっているのですが、「羊飼いと天使」。それでいいのかな？と思ってしまいます。「羊飼いと天使」が織りなす「光景」は実は何を伝えているのでしょうか？そこが大事です。それは「飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子」であり、それが「あなたがたへのしるしである」（2:12）と書かれているように、ルカは、この「しるし」を強調したかったのだと思います。メシア・救い主であることのしるし、それは天使たちの讃美の大声ではないのです。もっと目立たない、もっとひそやかな、そして、言ってみれば、もっと蔑まれたものの中に、メシアのしるしがあるのです。

カール・バルトが今から90年前（1933年）の説教の中でこのようなことを語っていて、本当にそうだなぁと思ったのですが、彼はこのように語っていました。―**「目に見える被造物、衆目を集める知性や能力、鮮やかな勝利、圧倒的な成功、豪奢な生活は、絶対に啓示ではない。まあ、そういうものがある。しかし本気で「啓示」に接したいと思うなら、そこで見ているものは万が一にも神からの啓示ではないことを、よくわきまえておく必要がある。神からのものであるには、ひそやかさが欠けている」**。逆説的な言い方ですけれども、彼は、本当の神様からの啓示というのは、いかにも神様がなさりそうなスペクタルな現象ではなくて、また、賞賛を集める人や事柄でもなく、もっと人目をひかない、魅力的ではないことの中にある、と言いたいのだと思います。

では、人はどこで神様の啓示に触れることが出来るのか。バルトは言います。**「神からの啓示は、扉が開くことだ。それはひとえに内側から開く。外側から開くことは出来ない。私たちが発見できるのは「しるし」だけであり、「まことの神・まことの人」である方（イエス）は隠れている。発見できるのは、ベツレヘムの「布」と「飼い葉桶」、そしてゴルゴタの十字架だけだ」**と。

[2]　「共に」痛み、生きるために

救い主の初めの証言者となった羊飼いたち。彼らに何か優れた点があったから主と出会うことが出来たなどとはどこにも書いてありません。或いは、差別される側に置かれていたから、社会の弱者だったから、目を留めて下さった、とも書いてありません。それだと、どちらにしても特定な人のための救い主になってしまいますよね。そうではなくて、天使が告げた言葉はこうでした。10節。「天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。」と。つまり、全ての人のために、ということです。

ちょっと脇道に逸れるようですが、最近NHKの番組で、ヒロイン、つまりこの世の中で活躍した女性にスポットを当て、その方の生き方や活動を振り返る番組を放送していまして、報道カメラマンとして活動され、今から10年前、45才でシリア取材の時に、流れてきた銃弾に当たって死んでしまった山本美香さんという方の足跡をたどる番組でした。私は観てとても感動したのですが、衛星放送チャンネルのなりたてのカメラマンであった時、彼女は痛い経験したのですね。どういう経験かと言うと、雲仙普賢岳の噴火があって、大人も子供も避難生活を強いられている。そこに入って行ってすぐにカメラを回し、取材を始めると、まだ動揺して気持ちが不安定になっている住民の人から、ズカズカ入り込んでくるな！出て行け！と怒鳴られます。でも取材をしてこの困窮している真実を伝えたいと願う。どうすればよいのか。カメラマンになっても自分は何も出来ないなと思う。けれどもその避難所に居続ける中で、いつも寂しそうにしている女の子が物を運んでいる途中で転んでしまったのをみて、その子を思わず助けるのです。カメラもいつの間にかケースにしまい込んで、その後は、取材は全くせずに、荷物を運んだり、給食の手伝いをしたりして、彼らの生活と一体化したのですね。そのような中で、高齢の方の「お弁当は有難いけど、野菜がたべたい」とか、心を開いた女の子のつぶやきが聞けるようになった、それが「報道」と言うこと以上に、同じ人間として「共に痛む」ことの原点を教えられる出来事となった、ということでした。そして山本美香さんは危険と言われる戦乱や内戦の現場に身を置き、カメラで現状を伝えます。なぜ外国のあなたがそんなことを？という質問にはこのように答えられていました。**「ここに外国ジャーナリストがいるということで戦いの抑止になることがある。戦いが終わることに協力したい」**と。そして、彼女の撮った人々の写真というのは、笑顔なものが多いのです。緊迫した戦時中とは思えないように笑っている。それは、山本さんと心が通じ合わなければ決してあのような笑顔にはならないだろなと思わせるようなものでした。

私は、この番組を見てイエス様のことを思ったのです。今日の招きの聖句で読んで頂いたフィリピの信徒への手紙2章からです。「キリストは神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じものになられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」そうです、私たちの救い主イエス・キリストは、私たちと一体となり、共に生きるために「人間」、また幼子にまでなり、最後は十字架の死を体験されたお方です。

[3]　さあ、見ようではないか！

実は今日の聖書の箇所で、イエス様の言葉はなにも記されておりません。当然ですね。まだ乳飲み子で寝ているだけですから。けれども「飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子」これ自体がもう言葉なのです。「しるし」とはそういうことだと思います。無言の内に既に主は語っておられます。主イエスの生ける言葉があなたの耳に届いているか？あなたの心に届いているか？と問われているのです。

主イエスの生き様がここから始まりました。「降誕」というのは、「降りて」「誕生する」ことです。主は私たちのために降りて来なければならなかったのです！山本美香さんは戦場で自分のような存在がいることで、戦争の抑止になることがあると語りました。それ以上に、神が私たちと同じ姿を取って下さている、と言うことがどれほど凄いことか、犠牲を払っていることかと思います。しかし、それほど、私たちは神様に愛されているのです。イエス様は、私たちを決して捨てない、とおしゃって下さいました。それが、飼い葉桶の中から響き渡っている声です。羊飼いたちは「あなたがたへのしるし」だ、と言われた時に、「さあ、見ようではないか」と、ベツレヘムへ急ぎました。私たちもそうありたいと思います。クリスマスとは、イエス様が私たちとの出会いを待っている、その招きが始まった日なのですから。「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか。」

お祈り致します。

「神はその独り子を与えられたほどにこの世を愛してくださった。それは御子を信じる者が滅びないで、永遠の生命を持つためである」。アーメン。クリスマスの主を讃えます。どうか、私たちの人生の只中に、既に主イエス様が来て下さっている事実に気付かせて下さい。羊飼いのように、神の言葉を聞いたなら、自分の中から外に出て、イエス様の大きな恵みいつも再発見することが出来ますようにお導きください。この一年間のあなたの憐みを心から感謝致します。この時も試練を抱えてている者たちの心と体とを守り、あなたの助けをお与え下さい。主の御名によって祈ります。アーメン。